「父ちゃんの凧」の二次読み・分析について

1．読み方教育の現状について

「国語教育」の必要性が強調される現在だが、その実態は、実用主義的なものがほとんどである。つまり、人格形成に関与する側面よりも、企業側からの切実な声におされての重要視に思えてならない。

もちろん、人格形成にかかわる主張もないわけではない。それは、「情操教育」としての物語の読み、とりわけ、読書が強調される。「読書」には、それなりの意義があるが、そこに「情操教育」を求めるのは、短絡的だといえる。たとえば、葡萄（剣道や柔道など）とかさまざまなスポーツにとりくませることで、礼儀を習得したり、チームワークを学んだりできると期待し、みごとに裏切られている事例が多いことと似ている。りっぱに、そうし精神面を鍛え習得した者もあるが、小学生段階では、ごく少数といわざるをえない実態を、多くのく学校関係者は目の当たりにしている。

「読書」、ましてや、物語の読みにそれを求めると、安易な徳目を教える道徳教育とも言えないものになってしまう。しかし、そうであっても、現代の日本人の倫理観の欠如、道徳観のゆがみをみたとき、せめて、そういうところに手がかりを求めたいという気持ちもわからないではない。一パーセントでも、「読書」をすることによって、人間性が豊かになれる子がいるなら、それは大いに意義のあることだ。また、活字になれるというだけでも、意義があるかもしれない。

しかし、今、「国語教育」の必要性が強調されるのは、そうした読みではなく、「説明文・論説文」の読みだと思われる。取扱説明書も読めない人が増えたりしているような現状にあって、企業では、プレゼンをするのに、商品の価値を簡潔に説得力ある表現をすることや、顧客に対してアピールする力が求められる。また、企画書を作ったり、新製品の開発等にあたっては、論理力が求められる。そういった点で、「説明文・論説文」の類が重要視されていると思われる。

さらにもう一つは、会話能力。これは、先ほどの理由に加えて、言葉づかいの乱れや相手を意識した会話力の低下が実態として裏にあるだろう。が、現実問題として、企業において、とくにグローバル経済化している現代においては、アピール力というのが筆数条件となっている。いわゆる、昔ながらの「日本人らしさ」ではなく、即戦力が必要とされていると思われる。文化としての日本語の素晴らしさを駆使し、日本人らしかった慎ましやかさや、言わなくてもわかるという力も念頭にはあるのだろうが、実際には、相手を言うことをよく聞き、相手を意識してしゃべる能力が強調されているところをみると、文化としての日本語の素晴らしさをつたえていこうというものはなく、論理的な力を、会話においても実践的に力をつけて欲しいと要求しているのだと判断する方が妥当だろう。

同様に、作文教育においても、同じ傾向は見られる。作文力は、けっして、生活綴り方ではなく、論理的な文章をコンパクトに書く力を要求されるのだ。

教育基本法が改悪されたことによって、こうした傾向は、今後いっそう具体的に現場に対して強まってくることは必至だ。そうした時、文学を読むとは何なのか、という基本的で「古典的」な問いは、やはり隅に追いやるわけにはいかない。人として子どもを成長させようとするのであれば。

今、現場教師は、大きな岐路に立たされているのだ。国家・企業的プロジェクトに乗るのか、純粋に、豊かな日本語の豊かな担い手を育てる（それは、日本の文化を継承することでもある）のかという。

ただ、最後に嘆かねばならないのは、現場の異常な多忙化が、現場教師からこうしたことを考えるゆとりを奪っている現状がある。ましてや、一つの文学作品を、じっくりていねいに読む時間もないという現実もある。

現状は厳しさを増すばかりだが、そのあおりを食うのは子どもたちであり、未来の日本だ。時々は、こうしたことに思いを馳せることが必要ではないだろうか。

2．二次読みについて

二次読みについては（一次読みもそうだが）、教科建国後部会でも、典型的な実践例が出されないまま、検討自体が途切れ、その理論も、二十一世紀になってからも、遅々と進んではいない。奥田靖雄先生のような研究者を失ったことが大きい。言語学者であり、しかもそれを教育の場における実践にむすびつける学者がいなくなってしまった。つまり、学者と現場教師との連携が途切れてしまったことが大きいと言わざるをえない。しかも、現場教師は、言語学からも遠ざかりつつあるから、実践的に検証することもなくなっている。

そのため、九十年代に出された、最後の二次読みついての基本的な立場が、いまだによりどころとならざるをえない。それは、奥田先生の次の指摘だ。

『…言語のくみあわせのなかに、まるごとの人間が形象化されている、ということになる。人間が諸側面へ解体されることなく、まるごとのすがたが具体的な形象として言語のくみあわせのなかにさしだされているのである。そうであるとすれば、文学作品の読みは、てっとうてつび、くみあわされた言語のなかに、場面のなかで行動する具体的な人間のすがたをおいもとめてゆかなければならない。

表現されている形象にしても、その表現の手段をことばにもとめることによってのみ、はじめて手にふれることのできる存在になる。言葉という存在の形式によってのみ、観念の世界は対象化されているのである。

一次読みでは、ことば、具体的には文とその構成要素である単語の、言語的な意味にしたがって、読みすすんでいく。ところが、この文と単語とは、場面あるいは文脈のなかではたらくことで、その場面あるいは文脈のとの関係のなかであたらしく意味づけをうけとるのである。あらゆる動作がそうであるように、意味づけは言葉行為にもつきまとう本質的な特徴である。そして、この意味づけが表現された形象として二次読みの対象としてあらわれてくるのだろう。

表現もまたことばを手段につくりだされているのであれば、文のどのような側面、構成要素がその表現をになっているのか、文に使用されている、文をくみたてている言語的な諸手段の言語学的な分析がもとめられることになる。
文の構文論的な構造、
文のなかにはいりこむ単語や慣用句、これらを文にまとめあげる文法的な諸手段、
あたえられた文を先行する文に論理的につなげてゆく接続詞、
段落における文の役わりを明示する、文末の諸手段、
相手へのはたらきかけを表現する終助詞、
イントネーション、
はなし手の現実にたいする態度をいいあらわすモーダルな諸手段
などがあって、これらの正確な言語学的な分析をおこなわずには、文の意味をとらえることはできないのである。

…場面、文脈との関係のなかで選択された、語彙的な、あるいは文法的な諸手段は、その表現的な価値のうえにあたらしく文脈・場面的な意味がうわのせされることになるだろう。
こうして、読み、なかんずく文脈や場面のなかで文の意味を読みとっていく二次読みは、使用のなかにある言語の言語学的な分析になってくる。』

わたし達の一次読み教材研究では、奥田先生が指摘されたなかみについても、いくらか踏み込んでいると自負している。そういう意味では、わたし達の考える一次読みは、読み過ぎなのかもしれない。しかし、その場面でとらえることのできる「意味の上乗せ」については、扱うことに無理はないだろうと考えてやってきた。
ところが、そうした一次読みを終えたあとでもなお、残る表現がでてくる。それは、作品を読み通すことによって、文脈的に新たに上乗せされた意味をもつ表現があるということだ。簡単なものにおいては、「小さな総合」ということで、段落を読み終わったあとにふり返って扱うこともできる。しかし、全部を読まないとわからない、気がつかない表現もあるだろう。

二次読みも「読み」であるから、一次読み同様、言葉から離れることをしてはならない。我がサークルでは、伝統的に、二次読みの対象を、「登場人物の行動の意義付け」「象徴的な表現」としてきたが、これは、どちらかというと、分析に近いような気がしている。なぜなら、行動の意義付けや象徴性は、主題や理想に結びつくものであるだろうから、それを問うことは、分析的にならざるをえないと考える。「二次読み」は読みとして位置づけるものだと考える。このあたりの整理・検討が難しい課題であった（言語学の裏付けも必要でもある）がために、二次読みの研究が棚上げにされてしまったのかもしれない。が、ここでは、単純に「文脈や場面の中で上乗せされた文や単語の意味」を考えることとしたい。

余談になるが、二次読みの対象は、すぐれた映画やドラマの表現に似ている。いちいち説明的に表現しないで、表情だけで語ったり、風景を挿入することで心情を表現したり、あるいは、見終わってから、「ああ、あの時のあの行動や言葉には、そういう意味があったのか」と気づかされたり。最近では、そうした映画やドラマに会う機会も少なくなった。それどころか、あの「進め電波少年」というバラエティー番組以来、過剰なほどのナレーションや字幕が入ることが増えた。読みでいえば、一次読みさえ邪魔をしているのが、今の日本の映像たちだ。
ちなみに、「ゲド戦記」というアニメ映画に対して、その父の作品に比べて、説明的な表現が多すぎるという評をした人がいた。宮崎アニメの魅力は、二次読みに該当する表現が散りばめられていることに対比するものであったのだろう。それが、観るものを感動させたのだ。説明は、人を感動させない。感動は、表現からうまれるものだ。

3．「父ちゃんの凧」の場合　　課題提起だけ

「父ちゃんの凧」は、ほとんど、一次読みで読むことができると思われる。もちろん、「小さな総合」を前提としてのことだが。

それでもなお、次の表現は、一次読みを終えたあとに、二次読みとして扱ってもいいものかもしれない。

■「父ちゃんの凧」という題名。文中では、「父は」という表現で統一されている。にもかかわらず、題名は「父ちゃんの凧」である。「父ちゃん」という表現（考えれば、実に簡単は話だ）と、この場合の「の格」がもつ意味について、もう一度考えたい。

■ どうです、りっぱな凧でしょう。わたしの父が、作ったんです。
　これ、わたしの、たからです。

①「どうです、～でしょう。」という言い方にこめたわたしの気持ち。
②「りっぱな」がになう、上乗せされた意味。
③「わたしの、」の読点。本来なら、「わたしのたからです。」であるべきところだ。この読点にこめられた気持ち。
④「たから」に上乗せされた意味。

■ ところが、父ときたらのん気なもので、兵隊として中国へ行ってまでも、凧を作っていたんですって。
「のん気」と思ったのはだれかということの確認。「のん気」に上乗せされた母の感情・評価的な意味。

■ 父は、あまりのうれしさに、なみだをこぼしたといいます。
　この「あまりのうれしさ」に上乗せされた父の感情・評価的な意味。

▼ 敵も味方もなく・・・・・。仲良く・・・・・。
　これは、一次読みでも読めるかもしれないが、一次読みで、たんに平和を願っている、としか読めていない場合、もう一度、ここにこめられた、わたしの感情・評価的な意味を考えたほうがいい。

　奥田論文で指摘されていることに符合しているのかどうかは、いささか心許ないが、現段階（個人的）では、以上が、二次読み対象になるのではないかと考える。それらを検討すると、そのどれもが、家族愛に結びつくことになる。それは、主題につながるものでもある。

4．分析について

　分析は、まさに作品を分析して、作品の「主題＝人の本質」と「理想＝願い」を導き出すものである。「作者が言いたかったこと」ではない。作者が未熟な場合、本人の意図とは別のものが、作品に反映されていることがしばしばある。それは、わたし達の会話場面において、よくみられることである。

　この作品の主題は、家族愛にあるだろうと思われる。ここでは、まだ、主題としてまとめることはできないが。そして、願いは、戦争に関することではないかと思われる。

　なお、以前、こうした歴史背景を前提とした作品について、「主題の二重性」が問題とされたことがあった。つまり、主題として、戦争に関するものもあるということだ。しかし、戦争というのは、背景を流れるものであって、多くの場合、悲劇的な原因、被人間性の原因として横たわっている。戦争というのは、そういうものだというのは、主題というよりも、前提なのではないだろうか。封建時代を背景とした作品においては、封建制の理不尽さが前提として横たわっているように。そうした中での人の生きざまが、人の本質として形象という方法で提示されるのが文学作品だ。だから、「主題の二重性」というのは、歴史的背景が問題となる場合は、一方を前提として考えるべきものだと考える。

　ただ、この背景が、「理想」を導くものにはなるだろう。「父ちゃんの凧」などの戦時を背景とした作品には、「理想」として、「戦争は、会ってはならない」という願いが共通して存在しているだろう。

5．分析の方法

分析の方法は、一つではない。作品によって、さまざまな方法が試みられればいい。

登場人物が、おもに一人である場合（「川とノリオ」など）では、「感情曲線」をえがくことが効果的かもしれない。主人公の感情の起伏をおっていくことで、「起承転結」もはっきりするかもしれないし、そうした感情にさせた要因を洗い出すこともできる。

基本的には、作品の構造を分析すること（はじまり・おこり・つづき・やま・おおづめ・エピローグなど）で、それぞれについて、何がかかれていたかを要約していく（この要約の力は、現在求められている国語力として重要視されているものだ）。それらをつらぬくものは何かというのが、「主題」となる。すぐれた作品は、一本の串で、みごとにつらぬかれている。

また、その過程において、それぞれの登場人物ごとに要約するいうこともある。「父ちゃんの凧」の場合、伝聞調であったり回想であったりで、人物像が明確にはえがかれていない。それだけに、それぞれの人物について、分析しながら考えていくことは、大切な作業になるのではないかと思われる。とりわけ、母の気持ち・感情は、書かれている言葉通りに受けとるわけにはいかない。大人ならわかるが、子どもにはわかりにくい感情かもしれないのだ。ちょっと不器用で無骨だけれど、母には父に対する深い愛情が変わらずにずっとあるし、父にも母とわたしに対する愛情がずっとある。（「父は、あまりのうれしさに、なみだをこぼしたといいます。」があらわすのは、それではないだろうか。）（母の生き方は、「一つの花」のそれに似ていて、父が徴兵されたあと、「わたしが語る」今（もしかしたら、母が亡くなったその日）までのくらしの中にもあるだろう。これは、完全な読み過ぎで、想像でしかないが、二次読みで扱った箇所が教えてくれるのは、母が父への愛情を持ちつづけ、父のわたしに対する愛情もしっかり受けとり、わたしを女手一人でちゃんと育ててきたというところにもある。読みでも分析でもないが、こうした、書かれていない「時間」を想像することも無駄ではないだろう。もちろん、書かれていることを手がかりするというのは大前提だが。

以上、分析について、ずいぶん乱暴に提示した。

ただ、現在の現場での「読み」では、基本的な読み「一次読み」をとばして、いきなり、この分析に入っている傾向にないだろうか。段落ごとに「課題」を設定したりして、その「解決」を目標とするのは、まさに分析である。残念ながら、分析は読みではない。分析は理解を促すことはできても、心情にしみるような感動は促すことはできない。もし、分析で感動する子がいるとすれば、その子は、かなり優秀な子で、自主的に読んでいるのだ。繰り替えしみることに耐えられる映画やドラマがそうであるように、ストーリーがわかっているのに先に感動した場面以外で感動したりするのは、すでに、何となく主題がわかっているからであろう。しかし、文学作品の読みは、自身が文を映像化しなくてはならず、能動的でなくてはならない。それだけに、分析で感動するというのは、なかなか困難なことだと思われる。

＊「二次読みについては、別掲のレポートを参考願いたい」

分析　佐桑